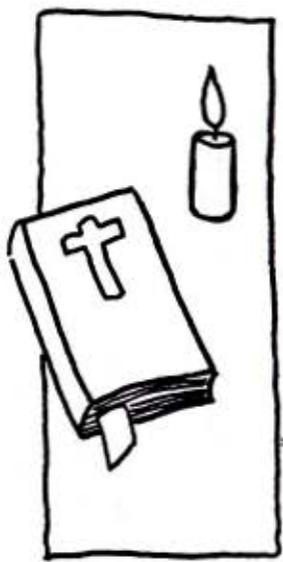


## キリスト教入門講座で

### 学ぼう(その一)

土屋 至



#### ●——福音のセールスマンになりたい

私は一九八三年頃コンピュータのセールスをしてきた。毎日足を棒にして売り歩く中身が、コンピュータではなく、「ほんものの福音」であったらという疑問が生まれ、それは徐々に望みへと変わっていった。

当時は、私の属してきた日本CLC(クリスチャン・ライフ・コミュニティ)は「福音宣教こそ私たちのミッション(使命)」として意識したところであった。CLCだけでなく、日本の教会自身が「基本方針」、そして「NICE」を通して「福音宣教」を選びつつあったときである。

ちょうどそのときに勧められたのが、藤沢教会でコロンバン会のグリフィン神父が始められていた「キリスト教入門講座リーダートレーニングコース」であった。私の所属する教会では、このコースを終えた信徒が入門講座をすでに開講していた。

このコースで、従来の「公教要理」のスタイルとはまったく異なった新しいカテキズムのあり方を学ぶことができた。講義形式中心ではなく、毎回のテーマにもとづくエクササイズ(実習)の課題が与えられて、

その結果を分かち合うことから始まり、毎回のテーマに対する解説がつけ加えられていくというスタイルがとても新鮮であった。それを通して入門講座のグループがひとつのコミュニティとなっていくことを大切にしていた。

なによりも大きな効果は、これなら自分の教会で入門講座を始められるという自信を与えられたことであろう。私はこのコースが終わって早速自分の所属する鶴見教会で入門講座を開講した。そしてほぼ同時に、私は現在の職場である学校に転職し、「宗教」や「倫理」の授業を担当することになった。コンピュータを売り歩いていたセールスとはまったく形は異なったが、「福音のセールスマン」になることが実現したのである。

#### ●——メンバーの多様性が豊かさを生む

毎週木曜日、夜七時から九時までが、私の担当する講座である。鶴見教会では、現在三クラスの入門講座が別々の担当者によって開設されているが、私のクラスは働いている人や学生が多い。二十代の若者から七十代の方まで世代的に多様なのも木曜夜のクラスの特徴であろう。

毎回五、六人から多くても十人くらい。今は私の妻がアシスタントをつとめ、必ずすでに洗礼を受けている信者の参加がある。私のクラスには、洗礼を受けてもなかなか卒業しない人やもう一度学び直そうとする、これらの信者の参加は欠くことができない。

一応復活祭後に新しい講座を開講することになるが、随時いつからでも参加が可能になっている。途中から参加する場合には一回りするまでは参加することをすすめている。

もうひとつ言えることは、参加者の多くはどこかでミッションスクールのキリスト教に触れているということである。卒業生であったり、父兄であったりする。これを見ると、やはりミッションスクールの福音宣教



における役割は決して小さくない。在校生の時は反発していたのに卒業して何年かたつて教会の門をたたき、洗礼に導かれることが多いということは、どのクラスにも共通しているようである。

### ●「いつも「静思のひととき」から始める

入門講座はまず「静思のひととき」から始めることがすすめられている。五十分くらいの瞑想を入門講座ではこう呼んでいる。はじめのころは簡単なガイドがある。姿勢をただし、目を軽く閉じて、呼吸を整え、体と心から緊張を解きほぐすことが終わったあと、日によって異なる瞑想のヒントが与えられる。そのガイドの例をいくつかあげてみよう。

——今日は、今日出会った人の表情を思い出してみよう。呼吸に合わせて、息を吸って吐く一呼吸に一人ずつ、できたら朝起きてから順番に会った人の顔を、スライドを映し出すように目の前のスクリーンに映し出してみてください。できたらその人がどのような表情をしていたか、不機嫌そうだったか、笑っていたか。家族からはじめて、電車で前に立っていた人や、道ですれ違った人など思い出せたら思い起こしてみ

てください。最後はこのクラスの人たちの表情を思い浮かべてみてください……。

——最近見た「美しいもの」を呼吸に合わせて目の前のスクリーンに映し出してみよう。自然の光景や植物、人の笑顔やその他「美しいな」と感じたものを色鮮やかに思い浮かべてみましょう……。

——今日の出来事の中でもっとも印象的なものを一つ、呼吸に合わせて、目の前のスクリーンに映し出してみよう。さらに昨日の出来事の中から、その前の日の出来事、その前の日、どこまで思い出せるでしょうか？……。

——最後に、この「ひととき」の間、あなたの心は何を感じ、頭の中をどのような思いがとびかっていたかを意識してみよう。もしあらぬ方向に気がいつてしまったら、それはどこから、どのように気がそれていったのか、想像がどのように発展していったのかを振り返ってみてください。きっとそれは今のあなたの何かを表しています……。

この「静思のひととき」は「アウェアネス・エクササイズ (awareness exercise)」といわれているもので、いわば「祈りの導入」にあたり、沈黙の中で心の動き

を識別するための訓練にもなるものである。祈りは一人で思索することではなく、むしろ神と対話することであるということを経験し、神からの応答は心の動きをおして与えられるということを実感するための貴重なひとときになるであろう。

何度か繰り返し返していくうちに、少しずつガイドを少なくしていく、そのうちにまったくガイドをしなくなつて、ただ「いつものように静思のひとときから」というだけで始められるようになる。

### ●「三分間生活報告」つまり「分かち合い」

「静思のひととき」のあとは、毎回「三分間生活報告」をしてもらう。そのテーマは「最近大きく心を動かしたことを紹介してください」である。

「心を動かしたこと」という中には「嬉しかったこと」「楽しかったこと」「あるいは「感動したこと」はもとより、「怒りを覚えたこと」「苦しかったこと」「つらかったこと」「悲しかったこと」も入る。それを三分間くらいで報告するわけである。話したくない場合にはパスすることもできると必ずつけ加える。

はじめは「ないなあ」といってパスする人もいるが、

何度か繰り返し返すうちに必ず語り出すようになる。ある人がこんなことをいっていた。「最初のころは静思のひとときに一生懸命に思い出していた。そのうちにここに来る途中で今日は何を報告しようかと考えるようになり、さらに明日は入門講座だ、さて何を報告しようかと前の日に考えるようになる。そしてついにはそれを感じているときに、そうだ、今度はこのことを報告しようと思うようになった」と。

これを毎回繰り返し返していくと、何よりも一人ひとりの生活や性格、個性がよくわかってくる。そしてさらに継続していくうちに「同じ時を共に生きていく感じ」の豊かさを味わうようになる。

信者の人がこのクラスにいるということは、クリスマスチャンとして信仰を持って生きるとはどういうことかをよく表してくれる。教会とはどういう人間の集団なのか、信者の生活はどうなっているのかなど、この「生活報告」から学ぶことはとても大きい。入門講座にすでに洗礼を受けた人が参加していることの意義がここにある。

M A C (アルコール依存症者の更正運動) から送られてきた人の「生活報告」はすさまじい。それは「奈落

の底を這いまわったような体験」から始まる。はじめは家族から見放されてその所在さえわからなかった人が、ある時「家族の所在がわかった」と嬉しそうに報告してくれた。そしてまたしばらくたって、家族と連絡が取れた、手紙が来た、電話で話した、そして会うことができたとその進行状況が、刻一刻と報告されたのである。それは「救われる」とはこういうことなのかということをとにも実感できるものであった。

これこそ「分かち合うことのすばらしさ」であろう。「分かち合い」という言葉こそ出さないが、ここで行われていることはまさに「分かち合い」なのであり、分かち合うことが生活、生き方を変えていくことを実際に体験しているのである。この「心を動かした」という問いかけは、実は「分かち合いのためのもっともよい問いかけ」であるとも思う。

●それは「コミュニティづくり」にほかならない

「静思のひととき」と「三分間生活報告」とが終わって、その日のテーマに入る。二時間のクラスのうち半分近くの時間がここまで「分かち合い」の雰囲気

気がそのグループに根付いてくるようになったら、参加者は間違いなく、この入門講座の時間を楽しみにして来るようになるのである。

私の入門講座は全部で六十回くらいプログラムであるが、それをひととおり終わったころには、とてもよいコミュニティとして成長している。私は講座が終わるころにいつもこう言わなければならぬ。

「実はこのグループは教会の中ではもっともよい共同体（コミュニティ）になっています。残念ながら教会の中にはこのように深い分かち合いのできるコミュニティはとても数少ないことを言わなければなりません。壮年会にしても婦人会にしてもここまで深く分かち合うまでにはまだなっていないことに早晩気づかれることでしょう。」

そのときがっかりしないでください。むしろ、ここで学んだことを活かして教会の中に分かち合いを広め、教会共同体を形成するために、さらにそれを職場や家庭、地域などの生活の場で広げていくために派遣されていくのだということを、わかってほしいと思います。」

(次号につづく)

(つちや・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭)